



若い頃、私は今でも忘れられない映画を見ました。それは延川県の作家・路遥の同名の小説を下敷きに改編した「人生」という映画です。本は、主人公の高加林と巧珍の恋愛物語ですが、筋はそのままに、物語を少々脚色して、見るものに深い感銘と感動を与えるものでした。特にその中で陝北の信天游(*)が「上河里的鴨子下河的鵝、一對對毛眼眼照哥哥」と歌うと、深い情感が心の中に沈みこんでゆくようでした。

* 陝西省北部地方で歌われる歌

芳芳を見た瞬間に私が感じたのは、何年かして芳芳が大きくなり、「人生」を映画かテレビドラマで取り直すようなら、絶対に芳芳を推薦して出演させたいということでした。芳芳は生まれながらのまつげの長い「まつげちゃん」なのです。

2001年5月、私が北山小学校を訪ねると、子供たちは学校の庭にしゃがみこんで文字を書く練習をしたり、教科書の暗唱をしていました。この辺り一帯、乃至は黄土高原全体の村の小学校でどこでも見かける様子です。窑洞の中は光が届かず暗いからでしょうか？ 窑洞の中の空気が籠もっているからでしょうか？ 或いは、紙や鉛筆が足りないのでしょうか？ おそらくこれらの原因が混ざり合っているのでしょう。私が校庭に入ってゆくと、子供たちは少し緊張したようで大部分の子供たちは頭も上げようともせず、遠くにいる子どもたちが眼の端で私達をちらりと見るくらいでした。私は何人かの女の子を選んで写真を撮りました。芳芳はその中の1人です。

その10日後、私は又北山村に行きました。学校では相変わらず笑い声がし、元気な子供たちが春先の燕のようにピーピー、チーチーとあちこちで飛び回っていました。その中に一際眼を引く女の子がいました。レースの付いた白いワンピースを着、背も高く、顔の色も白く、少女たちの中でとても目立っています。離れたところに立って望遠レンズで見ると芳芳でした。

同年8月のある朝、前回写した写真を携えて何人かの女の子を訪ねました。芳芳の家に来ると、彼女は起きたばかりでまだ顔も洗っていませんでした。(寝起きの)どこかぼんやりした姿が面白いので、彼女を竈の辺りや窑洞の前で何枚か写真を撮りました。また、窑洞の前の石板を利用してアンケートを書き込んで貰い、彼女が文字を書く姿をいろいろ写しました。私は可能な限り彼女の元気なしかしどこか物憂げな感じのある眼差しを写したいと心を砕きました。

芳芳の家を出て他の家に向い、暫く忙しく歩き回った後、村の坂道で思いがけず又芳芳に出会いました。芳芳は彼女より小さい女の子の髪を梳いて結んであげるところでした。彼女の妹だそうです。実は先程、私は芳芳のお母さんが芳芳の髪を梳かし束ねている様子を写真に撮っていたのです。面白いではありませんか！ 陝北のさまざまな



習俗は母親から教えられ、知らないうちに受け継がれて行っているのです。人々の風習も又こんな風に受け継がれてきたのではなかったでしょうか。

その後、芳芳は(四年生になったので)県の小学校に通うようになり、北山村を何回か訪ねましたが出会えませんでした。2003年の正月、やっと新しい衣服を着、母親と親戚のところに出かけようとしている芳芳に出会いました。しかし、慌しい折で残念ながらゆっくり話すことは出来ませんでした。

2004年7月、私は北山村を訪れますと芳芳がいました。多分、十何里かの道のりを歩いて県の小学校から家に帰り着いたばかりだったからでしょう。どうしてもいやだと言って私に写真を撮らせてくれません。お母さんがなだめたり、他の少女の写真を取り出して彼女に見せたりして気持ちを変えて貰いたいと思いましたが、どれも効果はありませんでした。少女は大きくなったので、気持ちも変わったのかもしれませんが。芳芳の理想は「大きくなったら医者になる」ということです。長いまつげの芳芳が白衣の天使になったら、それは本当に美しい絵になるでしょう。(田井訳)